

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マアナゴ

学名 *Conger myriaster*

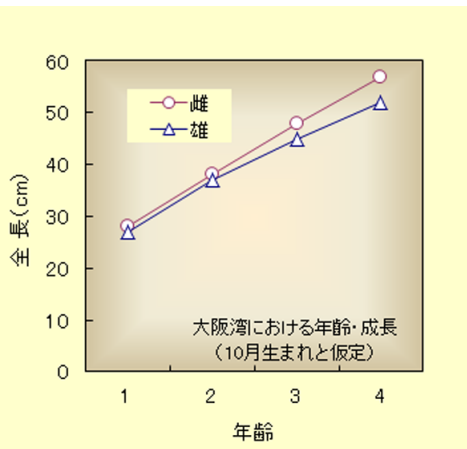
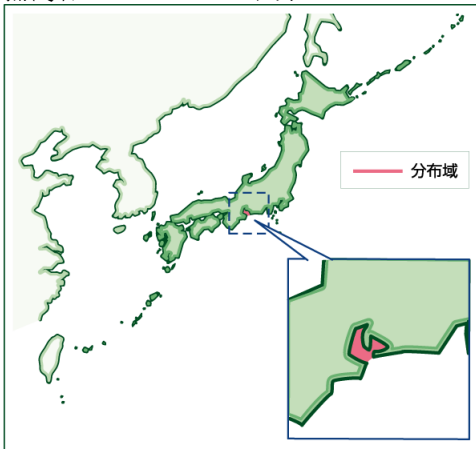
系群名 伊勢・三河湾

担当水研 増養殖研究所



生物学的特性

寿命: 湾内最高齢は3歳
成熟開始年齢: 不明、雌雄とも成熟個体が見つかっていない
産卵期・産卵場: 産卵場の一つが沖ノ鳥島南方の九州パラオ海嶺付近に確認されている、産卵期の詳細は不明
索餌期・索餌場: 周年、伊勢・三河湾
食性: 小型の底生生物、エビ類、魚類、軟体類など、成長につれ多様化
捕食者: 大型化
不明



漁業の特徴

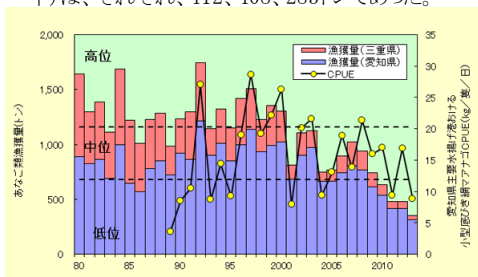
伊勢・三河湾における漁獲は主として、小型底びき網漁業、かご漁業により行われている。伊勢湾の三重県海域での小型底びき網の漁場は、湾奥部と湾口部を中心に、伊勢湾全域に形成される。かご漁業の漁場は、沿岸に沿って広く形成される。愛知県においては、知多地区の漁獲量が多い。また、本種の仔魚であるレプトケファルス(のれそれ)は、船びき網により混獲されている。



マアナゴの仔魚(レプトセファルス)は「のれそれ」と呼ばれ、春季に湾内に来遊してきて船曳網などで混獲される。産卵場の一つが沖ノ鳥島の南方に確認されており、「のれそれ」は南方海域から沿岸域に回遊してくると考えられるが、回遊経路などの詳細は不明な点が多い。

漁獲の動向

愛知県及び三重県における1980～2000年のあなご類漁獲量は、概ね1,000～1,500トンの範囲内で推移していたが、2001年以降は1,000トン以下の水準に減少し、2004年以降は減少傾向が継続している。なお、伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量は、県合計の「あなご類」の漁獲量から外海側の漁獲量を控除した量となり、直近3年(2011～2013年)は、それぞれ、412、408、283トンであった。

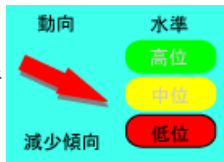


資源評価法

小型底びき網のマアナゴCPUEを資源量指標値とし、その経年変化を主体として資源状態を判断した。その他、各県の生物情報収集調査、標本船調査、漁場一斉調査ならびに新規加入量調査の結果も現在の資源状態の判断材料とした。

資源状態

資源量指標値とした小型機船底びき網漁船のマアナゴCPUE は、数年周期で増減を繰り返しており、2013年は低い水準にあった。過去25年間の資源量指標値の最大値と最小値間を三等分して水準を判断すると、現在は低位水準にある。動向は過去5ヶ年の資源量指標値の推移から減少と判断される。伊勢・三河湾で漁獲されるマアナゴの主体は前年に仔魚（のれそれ）として湾内に来遊した年級と考えられ、2012年の「のれそれ」の船曳網等による混獲量は非常に少なかったことから、2013年のマアナゴCPUEが低位水準だったのは、「のれそれ」の来遊量が少なかったことが大きく影響していると考えられる。2013、2014年の来遊量も多くないとみられる。



管理方策

資源状態が低位・減少と判断され、2013、2014年の「のれそれ」の湾内への来遊量も多くないと見られることから、現状の漁獲より抑えることが望ましい。なお、本評価対象は広域にまたがるマアナゴ資源の一部と見なせるが、全国的に漁獲量が減少傾向にあることから、資源全体への予防的措置としても現状より漁獲を抑えることが望ましいと判断され、2015年ABC上限値は伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量として250トンとした。また、加入量あたりの漁獲量増加を目標とすれば管理効果が期待でき、秋冬漁期の小型魚の保護、再放流は成長管理として有効である。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	250トン	$0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.97$	-	-
ABCtarget	200トン	$0.8 \cdot 0.7 \text{Cave3-yr} \cdot 0.97$	-	-

- ABC算定規則 2-1) によって、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 小型底びき網によるマアナゴCPUEの経年変化等から判断して、伊勢・三河湾のマアナゴ資源は低位水準にある
- 過去5ヶ年のマアナゴCPUEの推移から、動向は減少と判断される

管理方策のまとめ

- 仔魚の湾内への来遊量も多くないとみられること、また、本系群は広域にまたがるマアナゴ資源の一部と見なせるが、全国的に漁獲が減少していることから、漁獲を抑えることが望ましい
- 秋冬漁期の小型魚の保護が有効

執筆者：黒木洋明・鴨志田正晃

資源評価は毎年更新されます。